

教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会会長も務めた。

前回、「教育の原点」ということについて少しお話ししましたが、「〇〇は教育の原点である」という表現は、離島へき地や山間部の小さな学校の教育に限らず、特別支援教育や家庭教育でも同じようにいわれます。これらに共通していることは、子ども一人一人をよく見つめ、理解し、その子の成長のためになし得る最善を尽くさなければならないということです。そして「原点にかえる」ということは、源流に遡って物事の本質や基本をもう一度見極めるために出発点にかえるということであり、「初心忘るべからず」という教えにつながるものでしょう。

夏休みにキャンプ活動などで島を訪れた人が、島の子どもたちの朝のラジオ体操風景を見て「夏休みのラジオ体操をこんなに真面目にやっている中学生を初めて見ました。」と興奮して語ってきます。大したことはありませんが、こんな一つ一つの小さな感動や驚きが、教師の純粋な気持ちを引き起こさせてくれます。本当の兄弟ではなくても「〇〇兄ちゃん」「〇〇姉ちゃん」と呼び合い、家族のように面倒を見合う姿。連続長縄跳びで何回引っ掛かっても挑戦し続ける子どもと何回失敗してもそれを責めずに見守る子どもたち。ある会場で、誰も見ていない状況の中で、入口に散乱していたたくさんの履物をきちっと並べている女の子に偶然遭遇したときは、その美しい風景が神々しい空気に包まれているような感覚を覚えました。まさしく「心の洗濯」という表現がどんぴしゃりです。

「自分はなぜ教師になりたかったのか」と、純粋なあの頃の気持ちに立ち返って考えることは、自分が教師として落ち込んだり判断に迷ったりしたとき解決のヒントを与えてくれます。「自分はどんな教師になりたかったのか」「自分はどんな授業をしたかったのか」悩んだときの判断基準は、結局他人ではなく自分自身に問いかけたときに見えてくるものです。今、多くの教師たちが、教育の新しいキーワードや予測不能な問題に出会うたびに戸惑い、右に行ったり左に行ったり大きく軸がぶれ始め、ついには軸を見失っているような気がします。仕事や時間に追われる日々が続く、自分の現状と課題が客観的に見えなくなるとそこで成長は止まります。出発点の初々しい気持ちや心構えとなる軸が折れて、優先順位が狂っていないか。それを振り返る基準が「原点」です。

物事が複雑になってきたときは原点にかえってみる。このシリーズで何を伝えようか迷っていたのですが、「原点回帰」をテーマとして、心の洗濯になる話もできたらと思っています。

働き方改革が目的化すると教員の質が低下するという懸念がありますが、働き方の改善によって生まれた余裕は、「原点」を取り戻す余裕になってほしいものです。心が感じて動いたときに心のエネルギーも満たされていくでしょう。

ボッカンボッカーン
三島村の三つの島が
どうやってできたか知ってる？
私の住んでる黒島は
百万年も前の大昔
おっきな噴火で生まれたよ
おとなりの竹島と硫黄島も
大大大噴火で生まれたよ
三つの島は海のずうっとずうっと
下のところで実はつながってる
(小3児童)

